

『堀河院御時百首和歌』の雑部をめぐる

——『和漢朗詠集』と漢詩文学——

内藤 愛子

『堀河院御時百首和歌』（以下『堀河百首』と略す）の特色の一つとして、本歌取りや物語・詩句取りのような典拠をなんらかに求められる歌が数多く見られる。直接、関接の別はともかく、『万葉集』をはじめ勅撰集や「記・紀」、『伊勢物語』、『源氏物語』等の物語類や『和漢朗詠集』漢詩文学と民俗から故事に至るまで、その典拠は広範囲に及んでいる。また、そのように典拠歌が多数を占めているという特色は、『堀河百首』以前の百首歌にみられ、『好忠百首』以来の百首歌という定数歌の特色であると述べられている。¹⁾

『堀河百首』において典拠を求められる歌のうち、『和漢朗詠集』や漢詩文、中国故事、説話などの漢詩文学圏に典拠を求めている歌に關してみても、堀河百首題の設定に大きく関与していると考えられる『和漢朗詠集』と共通する歌題が大半である雑の歌題には、橋本不美男、滝沢貞夫氏の御指摘²⁾されているように、四季や恋の歌題に比べて、『和漢朗詠集』や漢詩文、中国故事、説話等に典拠を求めている歌が多数見出される。

この点から、今回は雑の歌題を中心に『和漢朗詠集』や漢詩文、中国故事、説話がどのような影響を与えているか又、歌題との関係について若干の考察を試みてみたい。

なお、本文は群書類従本に拠った。また、典拠歌と判断するのに際して『校本堀河院御時百首和歌とその研究 古注索引篇』の古注集成や慈延の『堀河院初度百首抄』を参考にした。

雑の部において『和漢朗詠集』や漢詩文、中国故事、説話などなんらかの關連が認められる歌がみられる歌題は「松」「竹」「苔」

「鶴」「関」「橋」「懐旧」「夢」「述懐」「祝」の十歌題である。それらの歌題の中には「苔」「関」「橋」「夢」の歌題のように『和漢朗詠集』と一致をみない歌題が含まれている。これらの歌題を歌題別に具体的に影響關係をみてみよう。

「松」の歌題においては永縁の歌一首のみが漢詩文の詩句に基づいて詠まれている。

1309 冬さむみ後にしほむといふなれと変らさりけり松のみとりは
この歌は「論語」子罕「子曰歳寒然後知松柏之後凋也」の詩句を単に翻訳したものと云える。

「竹」の歌題において、典拠のあるだろう歌は1314・1319・1325の三首
みえ、そのうちの二首が『和漢朗詠集』に典拠を求めている。

1314 す、しさにいく夜かねぬる呉竹の林は夏のふしとなりけり
匡房が詠じたこの歌は『和漢朗詠集』の源順の詩に

九夏三伏之暑月 竹含錯午之風
玄冬素雪之寒朝 松彰君子之徳 (卷下 松424)

の前半を詩句の意を取った詠歌で、縁語・掛詞を使用して技巧的に仕上げられている。また、隆源(1325)の歌

1325 わか友とわれそいふなる呉竹のうきふし繁き身ともなれ、は
は『和漢朗詠集』の篤茂の詩に

晋騎兵參軍王子猷 栽稱此君 唐太子賓客白樂天 愛爲吾友
唐太子賓客白樂天 愛爲吾友 (卷下 竹432)
の第三、四句を取って、縁語・掛詞を巧みに使い我身の歎きを詠じ

た述懐歌に仕上げられている。

また、中国の故事を典拠としたものは次の仲実の歌が上げられる。

1319 いにしえの七の賢き人もみな竹をかきしてとしをへにける

この歌は『普書』にみえる竹林の七賢人の故事を引いているが、竹林の七賢人の故事は『万葉集』以来詠まれており、目新しい故事ではない。

「苔」の歌題は、前述のように『和漢朗詠集』の歌題と一致をみない歌題であるが、『和漢朗詠集』を典拠としているだろう歌は1335

・1343の二首である。そのうち、次の紀伊の歌

1343 打ならず人もなければ君が代はかけしつゝ、みも苔生にけり

は『和漢朗詠集』の国風の詩に

刑鞭蒲朽螢空去 諫鼓苔深鳥不驚 (巻下 帝王663)

とあり、その後半の詩句の発想と表現を用いた詠歌で、しかも、内容的にも同様に治政を讃えた歌に仕上げられている。その点からもその詩歌を引いて詠じていると言えるだろう。次の仲実の詠歌

1335 ふむ人もなき庭の面に秋のよは苔薙にそ月はやとれる

は、『和漢朗詠集』の平佐幹の上句の発想を踏えた跡は見えるが間連が薄いように思われる。

晦跡未抛苔徑月 避喧猶臥竹窓風 (巻下 閑居621)

次に、漢詩句に拠ったと思われるものは師時(1337)と顕仲(藤

(1341)の歌に見られる。

1337年ふれは苔のみつらをゆふかけて岩の姿は神さひにけり

1341ねもなく岩ほの上にもす苔はかみをおほへる心地社すれ

この両者の歌が『白氏文集』の遊_二悟真寺_一詩に「石髪垂若_レ鬢。」の詩句の表現に基づいて、苔を角髪や髪に見立てるといふ技法や縁語・掛詞を巧みに使つて詠まれている。このように漢詩文に拠る見立ての手法を使うことによつて歌の世界を広げている。殊に、師時の歌は『源氏物語』の桐壺巻にみられるように少年の髪形である角髪と年を経るといふ対照のおもしろさがみられる。

「苔」歌題は『古今六帖』に分類がみられるのみである。また、

歌材としては従来、賀歌に詠まれてに過ぎず、これらの歌には、歌人達の歌題に対する苦吟の跡が推察される。

「鶴」の歌題においては『和漢朗詠集』の影響がみられるのは次の二首である。

『和漢朗詠集』の神仙策の文都の

鶴歸舊里 丁令威之詞可聽

龍迎新儀 陶安公之賀在眼 (巻下 鶴448)

の第一、二句の発想に拠つた仲実の歌

1351 故郷をわすれすぎなくまな鶴はむかしの名をもなのりける哉

は、『和漢朗詠集』の詩句を踏えた詠歌と言えるのだが、『搜神後記』にみられる、漢の丁令威が仙術を学んで、鶴に化して天に昇つたという故事を直接に、翻案した詠歌とも捉えられるので、必ずしも『和漢朗詠集』の影響と言えないところがあるだろう。

また、匡房の歌は

1346 澤ふかきな子をおもふ蘆田鶴は声も心も空にやあるらん

『和漢朗詠集』の五絃彈³

第一第二絃索_二 秋風拂松疎韻落 第三第四絃冷_一 夜鶴憶子籠中鳴 第五絃聲尤掩抑 瀧水凍咽流不得 (巻下 管絃463)

の一部の詩句を引き、しかも『毛詩』小雅、鶴鳴の「鶴鳴_二于九臯_一」聲聞_二于天_一」の詩句を取り合せた詠歌と言えよう。また、『毛詩』の鶴鳴は『枕草子』(日本古典文学大系)四一段「鳥は」に引用されておき、一般化していた詩句と思われる。その詩句の発想を取つた歌としては次の隆源の歌が上げられる。

1357 澤にすむ鶴のなく聲いたつらに空にきこえぬなけきをする

また、漢詩文学に典拠を求めただろうものとして永縁の歌が上げられる。

1356 まことにや蓬か鳴にかよふらん鶴にのるてふ人にとは、や

この歌は、李白の古風の詩句に「客有_二鶴上仙_一。」とみえたり、『列仙伝』上巻に王子喬の説話などにみられるように仙人は鶴に乗つていくということから発想を得て、機知に富んだ歌にしている。

「関」「橋」の歌題は『和漢朗詠集』と一致しない歌題であり、雑の歌題の配列設定からすると、これら歌題は歌枕を詠むべき歌題としての設定意図が窺われる歌題である。⁵³

そのうち「関」の歌題では『和漢朗詠集』の影響がみられる歌として匡房の歌が上げられる。

1410 相坂の関のせきもり出てみよ驛つたひの鈴きこゆなり

この歌は『和漢朗詠集』の杜荀鶴

漁舟火影燒浪 驛路鈴聲夜過山 (巻下 山水502)

の一部の詩句を用い、しかも相坂の関という歌枕を詠み入れており、この点からすると歌題設定の条件を満している歌と言える。

次の仲実の歌は、『史記』の孟嘗君列伝などにみえる故事を撰取して詠じている。この故事は『枕草子』等に見え、よく知られたものと思われる。

1415 遠つ道いそきてすきし関路には八聲の鳥を人そとなへし

「橋」の歌題では隆源の歌

1437 思ふこと橋柱にそかきつけて昔の人はいくらましける

は『蒙求』などにみられる司馬相如の相如題柱の故事を翻訳した詠歌である。

「関」「橋」の歌題において、歌枕歌題という設定意図を考えると、中国の故事を引いた仲実と隆源の歌は特徴的なものと言える。

「懐旧」の歌題には、公実と隆源の歌に中国の故事や説話に基づいて詠まれた歌がみえる。公実の歌は次のようである。

1521 をのゝえの朽しところの仙人のはかなき世には何かへりけり

この歌は『述異記』にみえる普の王質の故事を用いて、懐旧の心を詠んでいるが、この故事の発想に拠った歌は『古今集』911や『源氏物語』『枕草子』等にしばしば見える故事であり、物語類においては斧の柄を長い時間が過ぎることの譬えに用いられ、広く知られた故事である。

911 ふるさとは見しこともあらず斧の柄の朽ちしところを恋しかりける

隆源の歌は『蒙求』等にもみえる向秀聞笛の故事に基づいて、向秀が嵇康の誅された後、詠じた思旧賦の一部分である「經其舊廬。于時日薄。虞泉。寒水凄然。隣人有吹笛者。發聲寥亮。追想曩昔。激宴之好。感音而歎。」を翻訳した歌と言えるだろう。

1533 みし宿の庭は浅茅にあれにけりとなりのふえの音計して

「夢」の歌題は前述のように『和漢朗詠集』に見出せない歌題であるが『和漢朗詠集』を典拠としただろう歌は頭仲(藤)の歌のみである。

1546 みる人もあるかなきかに成行ははかなき世こそ夢には有けれど『和漢朗詠集』の白居易

往事渺茫都似夢 舊遊零落半歸泉 (巻下 懐旧743)

の上句の発想と表現に関連がみられ、この世の無常を夢にたとえるという伝統的な修辭に拠っている。

次に、「夢」の歌題において中国の故事、説話を踏えた歌は比較的多くみられる。そのうち、匡房(1538)、肥後(1550)の歌は『莊子』の齊物論にある莊周の胡蝶の夢の故事を引いているが、匡房の歌はその故事を翻案としてこの世の無常を詠じている。また、肥後の歌は、単に莊周の故事を翻訳した歌とも受けとれるだろう。

1538 百年は花にやとりてすこしてき此世はてふの夢にそ有ける

1550 花園の胡蝶となるとみし夢はこはまほろしかうつとやせん

次に、仲実の歌は『史記』の殷本紀にみえる武丁の夢の故事を基にし、それを翻訳した詠歌と言える。

1543 夢にみし人を現にえて後そ世もすなほにははや成にける

次の河内の歌は『列子』にみえる黄帝の夢の故事や『枕中記』の盧生の夢の故事などを翻案として詠まれたものと思われる。

1552 はかなしとたれかいひけんさめぬまの夢の中々久しかりけり

従来、夢は歌材として恋や哀傷、無常などの歌に詠まれていたが、これらの歌のように中国の故事に基づいた詠法はみられず、新しい詠法と言える。それは、少なからず「夢」が歌題として定着されていないということとの関連が充分に推察される。

「述懐」の歌題には『和漢朗詠集』を典拠としたであろう歌は公実と基俊の歌である。公実の歌

1569 何をして翁さひにけん朝ことに鏡のかけをかつとがめつ、
は『和漢朗詠集』の作者名が書かれていない。

何をして身のいたすらに老ぬらん年のおもはむこともやさしく

(巻下 述懐763)

と同様の発想と表現に拠った嘆老の歌である。だが、この歌は『古今集』や『古今六帖』に掲げられているので、直接『和漢朗詠集』に掲げたかは疑わしい。

基俊の歌は『和漢朗詠集』の正通の詩句

齡亞顏駟 過三代而猶沈

恨同伯鸞 歌五噫而將去 (巻下 述懐759)

の一部分の表現を摂取しているか、『漢武故事』や『蒙求』にみえる顏駟塞剝の説話に拠ったのか疑問が残るがいずれにしても、久しく身の微官に沈淪する我身の不遇を歎く心を重ねた述懐歌に仕立て上げている。

1580 唐国にしつみし人も我ことく三代まであはぬなけきをはせし

「述懐」の歌題において、漢詩文に拠ったものとしては仲実の歌が上げられる。

1575 隙過る駒よりもとき陽炎の玉きはるいそちの春に逢にける哉

この歌は『史記』の留侯世家にみえる「人生一世間、如白駒過隙」の詩句に拠り、時の過ぎることのはやさのたとえとし、年老いたことの嘆きを異体の旋頭歌として詠じている。

「祝」の歌題では師時が詠んだ歌

1594 には、ぬ民のかまともあらしかし国栄へたる君か御代には

は『和漢朗詠集』の作者名が記されていない。

たかきやにのぼりてみれば煙たつ民のかまどはきはひにけり

(巻下 刺史693)

と同様な発想・表現に拠って国家の慶賀を詠じた歌である。「祝」の歌題において『和漢朗詠集』に典拠を求めたであろう歌はこの歌のみ

である。また、漢詩文を摂取したであろう歌は三首あり、そのうちの基俊(1596)と河内(1601)の歌

1596 奥山のやつおの椿君か代にいくたひ陰をかへんとすらん
1601 枝しけきしら玉椿君か代にいくかへりかはおひかはるへき

は、共に『莊子』の逍遙篇の「上古。有大椿者。以八千歳為春。

八千歳為秋。」の詩句から、椿を恒久の象徴として捉え、各々「やつお椿」「しら玉椿」と詠み入れて、治政に関する慶祝歌に仕上げて

いる。「やつお椿」は『万葉集』にみられ語を摂取している。また、「しら玉椿」は『後拾遺集』453に詠まれ、同様の内容の歌が見られる。このことからすると、祝や賀の歌に椿が歌材として用いられていたと考えられる。

また、肥後の歌

1599 君か代はなる、川の底清みちたひすむへきかけそみえける

は『文選』の李蕭遠「運命論」にみえる「黄河清而聖人生。」の詩句に摂取して、天皇の治政の慶賀を詠じている。

以上のように、『和漢朗詠集』や漢詩文、中国の故事、説話の影響関係をみてきたがそれらを整理してみたい。

『和漢朗詠集』に典拠を求められる歌は「竹」「苔」「鶴」「関」「夢」「述懐」「祝」の歌題である。それらの歌題において、「苔」

「関」「夢」以外の『和漢朗詠集』と一致する歌題はその大半は共通する歌題の所収の詩歌にある句に典拠を求めている詠歌である。また、「苔」「関」「夢」の三歌題においても『和漢朗詠集』の詩歌を典

拠とした歌がみられ、「苔」は「閑居」「帝王」に拠った歌があり、「関」においては「山水」に拠った歌、「夢」は「述懐」の詩句を求めた歌がみられる。

このように、堀河百首題と『和漢朗詠集』の歌題と一致するかいなかは全く関係なく『和漢朗詠集』に詩句を求めていると言える。

漢詩文や中国の故事、説話となんらかの関連が認められる歌は

「松」「竹」「苔」「鶴」「関」「橋」「懐旧」「夢」「述懐」「祝」の歌題にみられる。

『和漢朗詠集』や中国の故事、説話に典拠が求められる歌を歌題各にみてきたが、特に、歌題との関連性は強くみられず、歌題の特徴とする迄のものは雑の歌題には見出せない。

だが、『和漢朗詠集』と共通しない「苔」「関」「橋」「夢」の歌題のうち、前述のように歌枕歌題としての設定意図が捉える「関」「橋」の歌題を除いた「苔」「夢」の歌題において、漢詩文や中国の故事、説話などの漢詩文学圏になんらかの関連がみられる歌が数多くみられるということは注目される。

歌をみてみると、『和漢朗詠集』の詩歌や漢詩文の詩句を撰取している歌は措辞や表現、発想が似ている歌までが見られる。そして、かなり一般化した詩句や故事もみられるが、中国の故事、説話に拠った歌の大半はその故事、説話を翻案としたものや詩句の翻訳したものに過ぎず、どちらも新鮮な感覚や新しい詩情はあまり現われていない。

『和漢朗詠集』や漢詩文、中国の故事、説話に典拠を求め、それらを取り入れるか、入れないかは歌人の歌題に対する姿勢の相違が受けとめられる。

『和漢朗詠集』の詩句を撰取している歌が多数みられるのは匡房である。匡房は『袋草紙』などに断片的に知りうる『和漢朗詠集註』からして殊に、『和漢朗詠集』との関係が極めて深いことが理解できらるだろう。また、漢詩句や中国の故事、説話を撰取している歌が多数を占めている歌人は仲実や隆源である。それは漢詩文学圏に対する関心や知識を示していると言えよう。

このように雑の部における『和漢朗詠集』や漢詩文、中国故事、説話などの漢詩文学圏に基づいた歌が多数見出せるということは、題詠であるという創作上の限定や雑の歌題の大方が歌題として定着していない新奇な歌題であるということと無関係なものとは考え難く、『和漢朗詠集』や漢詩文学圏に拠って題意の拡張・補充を計るという歌人達の歌題に対する積極的な一つの試みと受けとめてよいように思われる。

〔注〕

- (1) 橋本不美男、滝沢貞夫著『校本堀河院御時百首和歌とその研究 本文研究篇』(笠間書院 S 51)
- (2) 注1に掲書。
- (3) 川口久雄校注『和漢朗詠集』(岩波書店 S 40)の頭注に「文集、池上竹下作の詩に「水能く性淡にして吾が友たり、竹心虚しきを解す即ち我師。」この句の記憶ちがいで竹を「吾が友」という」とある。橋本不美男、滝沢貞夫著『校本堀河院御時百首和歌とその研究 古注索引篇』の古注篇の「陽明文庫古注」に「白樂天文云竹は空心故為吾友」とある。『和漢朗詠集』432の歌が池上竹下作の詩に拠ったものとするなら、隆源の歌はその詩句を踏えたという可能性も考えられる。
- (4) この詩歌の出典は『白氏文集』卷三新樂府 五絃彈である。
- (5) 拙稿『堀河百首題雑の歌題覚え書』(『文芸論叢』第17号 S 55)
- (6) 『枕草子』(日本古典文学大系)の一三六段頭の弁の、職にまわり給ひてに見え。
- (7) 斧の柄は『源氏物語』の松風の巻、胡蝶の巻に引用され、『枕草子』(日本古典文学大系)の七四段と三〇八段の歌にみえ、その歌は『拾遺集』1339哀傷に見え、『道綱母集』及び『蜻蛉日記』にも見える。
- (8) 早川光三郎著『蒙求下』(『新釈漢文大系』58 明治書院)
- (9) この歌は『古今集』1063では読人しらずの歌であり、『古今六帖』雑思にも作者名が記されていない。また、『和歌體十種』『和歌十體』の直體の歌にみられる。
- (10) 伝本にはこの歌の後半の部分は異同が激しくみられる。注1の掲書の本文篇參証。
- (11) この歌は『俊賴髓腦』に「みかどの御製は大鶴鵠の天皇のたかみくらにのぼらせ給ひて還かになかめやらせ給ひてよませ給へる御製」として「是はみやこうつりのはしめにたかみくらにのぼらせ給ひて民のすみを御覽しよませ給へる歌なり」と説く。また、『新古今集』卷第七賀歌70にみえ、「仁徳天皇御歌」とされて国富めるを御覽して」という詞書きがあり、「仁徳天皇御歌」と作者が書かれている。
- (12) 岡田正之・佐久節訳『文選下』(『国訳漢文大成』)
- (13) 柏木由夫氏『堀河百首をめぐって』(藤原仲実・源頭仲・源俊頼の百首歌)、『和歌文学研究』第35号 S 51 參証。